

# 上京中学校校庭出土の金箔瓦

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 掘検出状況



写真2 桐文軒丸瓦・軒平瓦



写真3 「上」字鬼瓦

1987年5月上京区一条通室町西入東日野殿町にある京都市立上京中学校の校庭内で発掘調査が行なわれました。この調査で安土・桃山時代の金箔瓦が多量に発見されました。金箔瓦とは、瓦に漆を塗りその上に金箔を張り付けたものです。

金箔瓦が使われ始めたのは、織田信長が入洛し、永禄12年(1569)に旧二条城を造営した時で、織田家の家紋である木瓜紋などを金箔瓦にして屋根を飾ったと考えられています。豊臣秀吉の時代になると、大坂城の築造があり、それにつづいて天正15年(1587)には聚楽第が、さらに文禄3年(1594)

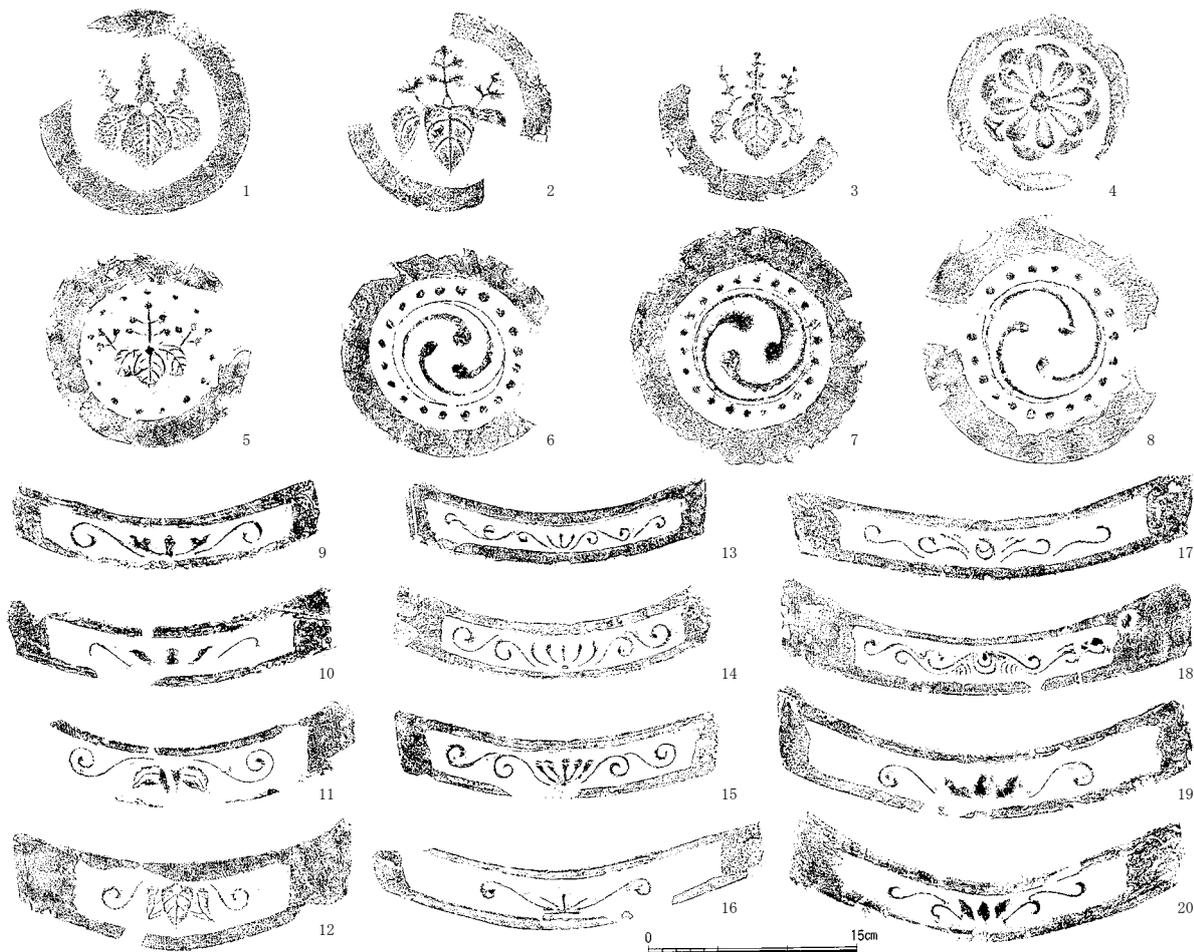
には伏見城が造られました。これらの建物にも色々な文様や形の金箔瓦が使われたわけです。京都ではそういった遺跡地の発掘調査を多く行っており、様々な遺物とともに金箔瓦も出土します。

調査中に金箔瓦が集中して見つかったのは、戦国時代に防禦用に掘られた堀(写真1)の中からです。この堀の大きさは幅が6m、深さが3.4mある規模の大きなものです。ところがこの堀は桃山時代になって、土橋状のものを造るために一部埋められるのですが、その際に盛土を水の侵食から護るため、不要になった多量の瓦を側面に積んでいました。金箔瓦はその中に混

ざっていたものです。ここで注目されるのは、驚くほど金箔の残りが良かったことです。

出土した金箔瓦には軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・棟込瓦むなごみなどがあります。金箔瓦の出土総数は221点あり、そのうち堀からのものは134点ありました。

軒丸瓦・軒平瓦の種類は、あわせて100種類に分けられます。掲載した図はその一部です。軒丸瓦・軒平瓦に金箔を押す部分は、基本的には文様部や外縁部の突出面です。ただし軒平瓦は、軒丸瓦で隠れる両端には金箔は施していません。拓本の1・2・3は桐文の軒丸瓦です。2はいわゆる五三の桐



出土瓦の拓影（瓦右下の数字は、本文中の瓦番号と同じ）

で、1・3は五七の桐文です。金箔瓦の下地には、接着剤として漆が使われます。この漆は通常黒漆ですが1は朱塗を使っています。桐文はこの時代よく使われる文様で、今回の調査地周辺や大坂城跡・伏見城跡からも出土しています。4は菊花文の棟込瓦で、右下の花弁に「上」の逆字が陽刻されています。これと同じ瓦は京都市内で数点出土していますが、文字の意味は不明です。5も五三の桐ですが、軒丸瓦ではなく鬼瓦類の一部で、裏面にはがれた痕跡があります。6・7・8は巴文の軒丸瓦で、1～4に比べると大型のものが多く、8は径が18cmもあります。軒平瓦は大型と小型に明確に分けられます。

瓦の文様には色々なタイプがあり、いずれも中心飾りに左右対称に唐草文様を配しています。11・12の中心飾りは桐文で、12は瓦当面の縦幅が広い特殊な形をした瓦です。16・19は文様帯の左右に空白を広くとり、18は左右の外縁を長くしています。これは瓦を葺く際に軒丸瓦で隠れることを意識したためです。鬼瓦（写真3）は丸輪の中に「上」字を配したものです。金箔は前部の突出面と後部板状部の側面（はりかわ）に使われています。この鬼瓦は棟の両側に飾る二個体分の破片があります。

金箔瓦は城郭以外に諸大名の屋敷にも使われました。そこで、今

回出土の金箔瓦はどのような建物に使われたのか、またどんな人物に関係するのかに興味をひかれます。ところが調査地に関係する桃山時代の史料がほとんどありません。ただ、江戸時代（寛永14年）の洛中絵図を見ると「寿命院」という寺があります。しかしこの寺の歴史は明らかではありません。また、調査地の西側は讃州寺町ですが、古くは松の丸殿町とも呼ばれ、秀吉の側室である松ノ丸殿と称する女性の屋敷があったとされています。

このように金箔瓦に関係して色々なことが考えられます。さらに調査資料を整理すれば、興味深い事実がわかるでしょう。